

## 歴史資料から見た災害列島

溝口常俊

日本は歴史上、地震、雷、火事、洪水などの自然災害に加えて、飢饉、伝染病などの脅威により多くの犠牲者を出してきた。それぞれの歴史的事実については記録され、報道され、研究もなされてきた。しかし、こうした災害に対して従来十分に活用されてこなかった資料に過去帳と日記がある。この両資料は災害記録を目的としたものではないが故に看過されてきたのだが、じっくりと読み込むことにより事実としての被害実態が明らかになってくる。幾多の災害を乗り越えてきた前人の知恵も学び将来に活かすことができる。

本大会での報告では、その研究構想を述べるとともに、予備調査としておこなってきた全国37カ寺での過去帳閲覧の状況と分析結果の一部を紹介した。

本研究の特色は次の3点である。1) 災害史研究の中で過去帳分析を位置付けること。年月日ごと、男女別、年齢別死者数を明らかにし、各寺院の檀家別ではあるが、ローカルな実態を把握すること、2) 寺院が立地する地域を概観するための地誌・統計書、市町村史類、絵図の活用、被害に遭遇した際の個人的な行動を知るための日記分析、そして3) フィールドワーク、聞き取りを重視して、いかなる環境のもとに災害が発生したかを考え、将来の災害対策に知見を活かすことである。この3点を丹念に行い、地域比較を行い、災害列島日本の過去と未来を連続的に捉えていく。

過去帳の分析結果をいくつか紹介した。①広島県因島のM寺、長崎県樺島のM寺では、海村ならではの悲劇(同日に成年男子が多数死亡)が繰り返されていた。②岐阜県のK寺、名古屋市のJ寺では濃尾地震(明治24年)の死亡者数、寺院の倒壊状況等が記載されていた。③山梨県のS寺、静岡県D寺、M寺では文久2年のハシカとコレラの犠牲者が多数出ている、④秋田県大館市のR

寺では天明、天保飢饉死者数が群を抜いていた。江戸時代中後期(1704-1868)164年間の死者数の年平均は15.0人であり、その倍以上の死者が出た年は次の通りである。寛延元年(1748):40人、明和8年(1771):51人、安永3年(1774):31人、天明4年(1784):111人、天保4年(1833):31人、同5年:69人、安政4年(1857):31人、文久2年(1862):42人、同3年:37人。全国的な大飢饉の年の天明4年の死者数111人はすさまじく、同じく天保4年の69人も異常である。文久2年は全国にわたってコレラが流行した年で、その影響が秋田北東の山間にまで来ていたに違いない。明和8年は子供狙いの疫病(はしか、天然痘)と考えてよからう。

歴史資料の中で日記としては尾張の『鸚鵡籠中記』、八戸の『鮫御役所日記』、それに絵本として富士市の『ディアナ号がやってきた』を取り上げた。

元禄16年(1703)の11月22日に大地震が起こったが、尾張藩士の日記『鸚鵡籠中記』によると、その日は津波も起ったようで、飛脚が小田原の海で見たその状況が記され、戸塚宿での機転を利かした宿主の「急ぎ山へ上り給へ」という避難勧告が書かれていた。地震に津波は付きもので、その対策も実践されていたことがわかる。

東北地方で過去最大の犠牲者を出した天明の飢饉の際に、八戸の『鮫御役所日記』の4月28日には、遠路はるばる越後の新発田から米を搬入した船頭と水主に褒美が与えられたことが書かれていた。こうした物資の搬入は飢え人救済にかなりの貢献をなしたものと思われる。

富士市には、安政元年の大地震の際に津波が押し寄せ被災した住民たちが、自分たちが被災者であるにもかかわらず、難破したロシアのディアナ号のプチャーチンをはじめとする船員たちを助け

た話が残されており、『ディアナ号がやってきた  
—日本人とロシア人—』(富士市  
日ロ友好協会, 2010) という絵本にまとめられて  
いる。

こうした過去帳や日記分析, さらには現地での  
現場観察と聞き取りから, 歴史的災害の事実と住  
民の対応を知ることが出来ることを述べた。

(名古屋大・名誉)